

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 認知言語学

大神 雄一郎

本稿は、2020年の認知言語学の研究に関し、表現学・表現論にも関わりを有すると思われる動向について論じる。2019年4月に発行された『表現研究』109号では、2018年の認知言語学の研究動向の1つとして、眞田敬介氏から「認知言語学の根本を整理し問い直す動き」が示された。そこから2年を経たところで、この動きを発展的に引き継ぐものとも思われる1つの動向として、ここでは「認知言語学の知見を総合的に活かす動き」に焦点を当て、この観点から3つの文献を紹介したい。

1つめに野村益寛『英文法の考え方 英語学習者のための認知英文法講義』（開拓社）を挙げる。同書は、英文法を「無味乾燥」な規則の体系としてではなく、「思い、すなわち意味を形にするための仕組み」として理解することの重要性を主張する立場から、認知言語学、特に認知文法の知見を総合的に用いて英文法が表す意味の体系性に迫るものである。辞書や文学作品からも引用される多くの例文を通じ、文法が表す意味、あるいは意味を形として実現する文法の姿についての見通しが得られる。

2つめには棚山洋介『実例で学ぶ認知意味論』（研究社）を挙げたい。同書は、現代日本語の身近な表現における意味の広がりや、意味と形式の特殊な結びつきに目を向け、認知意味論を中心とする認知言語学の発想を広く提示するものである。新聞や文学作品などに用いられる数多くの生きた表現をもとに、日本語の様々な興味深い表現において「なぜこの形式によってこの意味が表されるのか」という事情について、表現の背後にある認知の働きに注目する立場から明快な説明が示されている。

上掲の2冊には、認知言語学に馴染みのある読者には既知の情報も少なからず含まれるであろう。ただし、豊富な言語事例に基づき、日英語の表現について体系的に、多角的に論じる両者は、認知言語学に通じる読者にも有益な学びを与えてくれる。これらに対し、より特定の表現に関する研究として、3つめに吉村公宏『英語中間構文の研究』（ひつじ書房）を挙げたい。同書は英語の中間構文について、認知言語学の意味・文法・構文観を結集して論じるものである。言語表現の成立と発達に関わる史的・社会的側面にも目を向け、「属性」概念の認知的基盤、また2通りの「主体化」について示したうえで、「主客合一的な認識モード」から中間構文を特徴づけている。認知言語学的知見を総合し、中間構文の実態と成立基盤について1つの包括的な見方を提案する本書は、研究の深化と議論の拡大の両面で、中間構文の研究、そして言語表現の形と意味の結びつきに関する研究に大きな貢献を果たすものと期待される。

以上に加え、上掲の各書とは別の形で「認知言語学の総合力」を示す文献として、米倉よう子・山本修・浅井良策（編）『ことばから心へー認知の深淵ー』（開拓社）と松本曜教授還暦記念論文集刊行会（編）『認知言語学の羽ばたきー実証性の高い言語研究を目指してー』（開拓社）という2冊の記念論文集を挙げておきたい。認知言語学の観点から、様々な表現に関し、興味深い議論が展開されている。（大阪大学）